

# 秦・前漢皇帝陵墳丘研究の新認識

焦 南峰（陝西省考古研究院）

## 1. 研究の現状

長らく関中地区中央の秦・前漢皇帝陵の墳丘について、研究者達は様々な角度から研究を実施しているが、その概要を次に述べてみたい。

### （1）墳丘形態から見た考古学的型式学による研究

#### ①秦陵

袁仲一は「秦始皇帝陵の墳丘形態は覆斗形あるいは四角錐体の先端部を除いたような形をしている。墳頂部はわずかに平坦で、斜面の中腹には2つの緩やかな斜面状の段を有し、三段で築成されている。現在の墳丘は南北長 350 m、東西幅 345 m、周囲は 1,390 mで、墳頂部には東西 24 m、南北 10.4 mの長方形の平坦部がある<sup>(1)</sup>。測量調査の結果、元来の墳丘の大きさは方形であり、南北長 515 m、東西幅 485 m、周囲は 2,000 mであった」と考えている<sup>(2)</sup>。

また王学理は、「始皇帝陵の墳丘は4つの稜を持つ台形で、底辺は 345 × 350 mで、高さは 51.7 mである。墳丘の中腹に内側へ向かって小さくなる2つの段があるが、これは同時期の漢代劉向が言う「上崇三墳」の情景と完全に一致する」と考える<sup>(3)</sup>。

楊鴻勛は異なった見方をしており、始皇帝陵の覆斗形の墳丘は、享堂が多層に重なった土台である「壝」の遺構であり、元々は地面の上に中山王陵よりも更に大きな数階建ての享堂のあった可能性があると思定する<sup>(4)</sup>。

#### ②前漢皇帝陵

李毓芳は、漢代陵墓の墳丘形態から坊形、覆斗形、円丘形、山形の4種類に分類する<sup>(5)</sup>。前漢皇帝陵の盛土は一般的に「堂」の形であり、わずかに坊形を呈するものがあり、またわずかではあるが、前漢皇帝陵の上中部は上に行くほどすばまる台状を呈すると述べている<sup>(6)</sup>。

王学理は、前漢 11 代の皇帝陵及び皇后陵は、山を陵とし墳丘を持たない文帝を除いて、ほとんどは覆斗形で作られており、昭帝の平陵・元帝の渭陵・成帝の延陵と平帝の康陵は上段ほど小さくなる階段状を呈すると述べている<sup>(7)</sup>。

筆者のこれまでの見解を述べると、前漢の諸皇帝陵は、山を陵墓とした、一種の崖墓である霸陵を除き、版築の盛土によって形成されている。盛土は方形を呈しており、多くは覆斗形で、個々の陵墓は二層台式を呈する<sup>(8)</sup>。

梁雲は、漢の皇帝陵の盛土は「廡殿頂」と「二層台」の2種類の形式があり、後者は始皇帝陵の三重の陵に類似しているとする<sup>(9)</sup>。

## （２）墳丘高と体積に関連する問題

王子今は、『漢書』劉向伝に「始皇帝は驪山の阿に葬られ、下に三泉を鑿し、上に山墳を崇し、その高さは五十余丈、周回は五里余り」と記載されていることから、始皇帝陵の盛土土量は1,102,500 m<sup>3</sup>であり、また秦代の土木作業の従事者の作業率から、毎日直接現場の作業に従事した作業員数は少なくとも582,785人であると算出し、文献中にある「天下の徒、送詣すること七十余万人」は信頼できる数値であると述べている<sup>(10)</sup>。

これに対して劉占成は、「始皇帝陵は漢の武帝茂陵と同じく、2,000年を経ても盛土の高さに大きな変化はない。現在の高さは34 mであり、当時の高さもまた約40 mを超えず」、「最新の測量によるデータから、始皇帝陵の墳丘の土量は1,499,184 m<sup>3</sup>であり」、このことを根拠として、「始皇、驪山に葬られ、陵を起こすこと五十丈」には、疑義がもたれると指摘する<sup>(11)</sup>。

段清波は「実際に計測した秦陵の墳丘高のデータと『漢書』に記載のある「五十余丈」については差が大きく、また、2千年間の風雨による土の流出でさえもこれほど大きな降下はない」とし、政治・軍事の情勢の分析から、秦陵の盛土は秦末の農民蜂起の影響で最後まで完成しなかったため、『漢書』に記載のある「五十余丈」は、設計時の高度である可能性があるとして指摘する<sup>(12)</sup>。また、段清波は新発見の考古資料のデータから、始皇帝陵はただ木造瓦屋の壁があっただけで、版築の段の外側の各段の所に木造建築は無かったと考えている。遠方からの外観観察から、陵墓上には中心部以外は、九段の木造の高台建築物があり、始皇帝が埋葬された後、その墳丘が築かれたと述べている<sup>(13)</sup>。

## （３）墳丘形態の研究意識に関する問題

梁雲は、「墳丘が二重あるいは三重で造成されているのは、伝説の崑崙山を模倣している」とする<sup>(14)</sup>。

王志友等は、始皇帝陵が三層の階段式の堂壇形式を呈するのは、一つは当時流行していた高台建築形式の影響であり、もう一つは神仙、通天思想などの影響の結果であるとしている。秦漢皇帝陵の三層の階段状及び覆斗形の墳丘形態については神に通じ、天に法ることを意味していると述べている<sup>(15)</sup>。

以上の秦漢皇帝陵の盛土に関する多方面の研究は、重要な学術的な意義がある。

## 2. 秦・前漢皇帝陵盛土に関する移り変わりの歴史考察

雲夢睡虎地秦墓出土の竹簡には「何をか甸人という<sup>(訳註1)</sup>。孝公、献公の冢を守る者なり」とあり<sup>(16)</sup>、秦では献公（在位：前384～前362年）、孝公（在位：前361～前338年）の頃には、既に陵墓に墳丘があったことが知られている<sup>(17)</sup>。『漢書』劉向伝では、「秦の恵文、武、昭、熾襄の五王に及び、皆大いに丘隴を作り」とあり、秦の人々の間では陵墓に盛土を築くことが定型化し、大型化していったことを反映している。前漢になると陪冢を含む皇帝陵について相当規模の墳丘が定型化していった。

秦、前漢皇帝陵の墳丘の検討に入る前に、我々は形成、破壊、修復といった歴史上発生した変化について振り返っておく必要がある。

### （1）形成

言うまでもなく盛土は陵墓の位置を示す構造物であり、秦漢皇帝陵もそうであるように、通常は陵墓の築造時に版築も完成する。我々の考察の中心は盛土の形成ではなく、その変化なので省略する。

### （2）破壊

秦、前漢皇帝陵の盛土は盗掘、風雨による流出、生産活動など様々な原因により破壊を受けており、その中で盛土に最も大きな影響を与えるのは歴代の盗掘である。『三国志』魏書文帝紀によれば、「古より今に及び、未だ亡びざるの国あらず、また掘らざるの墓無きなり。喪乱（漢が滅んで）以来、漢氏諸陵発き掘られざるは無く、乃ち玉匣・金縷を焼取するに至り、骸骨ならび尽く。是れ焚如の刑、豈に重痛ならん哉」とある。

文献の記載に依れば秦、前漢皇帝陵は少なくとも3回大規模な破壊を受けている。

1回目は秦の末期である。『史記』高祖本紀に、「項羽、秦の宮室を焼き、始皇帝の冢をあば掘き、ひそか私にその財物を収めたり」とある。

2回目は前漢末後漢初頭である。『漢書』王莽伝には、「（後漢建武二年、即ち26年）赤眉、遂に長安宮室市里を焼き、更始を害す。民、飢餓し相食み、死者は数十万人、長安虚となり、城中人行無し。宗廟園陵皆発き掘りて、唯だ霸陵杜陵のみ完きなり」とある。

また『後漢書』劉盆子伝には、「盆子、王の車に乗り、三馬を駕し、数百騎を従へり。乃ち、南山より転じ、城邑を掠める。更始が將軍嚴春と鄆に戦い、春を破り、これを殺し、遂に

安定の北地に入る。陽城の番須の中に至る。大雪に逢い、坑谷皆満ち、士多く凍死し、乃ち復還し、諸陵を発き掘りて、其の宝貨を取り、遂に呂後の屍を汚辱す。」とある。

3 回目は後漢末である。

『後漢書』董卓伝には、「(後漢初平元年、即ち 190 年) 又た呂布をして諸帝の陵及び公卿已下の冢墓を発き、其の珍宝を収めしむ」とある。

『後漢書』礼儀志下の注には、「臣昭、董卓が伝を案ずるに、「卓、呂布をして諸帝の陵及び公卿より以下の冢墓を発き、その珍宝を収めしむ」と。卓が別伝に曰く「成帝の陵を発き、金縷を解き、含璣を探す」と」と引かれている。

この他、唐末の黄巢の乱の際にも、温韬等による関中での唐陵、秦・前漢皇帝陵の盗掘から逃れることはできなかったと考えられる<sup>(18)</sup>。

大規模な盗掘があれば、元来の盛土は当然大きな破壊を受ける。

### (3) 修復

秦・前漢皇帝陵の大規模な修復が文献に見られる。

『後漢書』光武帝紀には、「(後漢建武 2 年、即ち 26 年) 秋七月丁丑、幸沛、高原廟を祠る。詔して西京園陵を修復す」とある。

『全唐文』太宗卷至祭古聖賢陵墓詔には、「(唐貞観 4 年、即ち 630 年) 漢氏諸陵…若し墮壊有らば、即ち宜しく修補すべし、務めて周<sup>かな</sup>尽にして、以て朕の意に称はしめよ」とある。

『宋書』真宗本紀には、「(宋景德元年、即ち 1004 年) 冬十月壬午、詔して歴代聖賢の陵墓を修葺せしむ」とある。『宋史』吉礼志には、「(宋乾徳初(963)年) 凡そ諸陵に開発を経る者有らば、有司袞冕服、常服各おの一襲を造り、棺槨を具して以て葬り、坎日<sup>おお</sup>に掩い、在る所の長吏祭を致す」とある。

文献資料では、秦漢皇帝陵は初めて大きな破壊を受けた後、大規模な修復があり、この修復過程において正確に盛土の位置、形状、高さなど、陵墓を元のように復元できないであろうと、我々は懐疑的な態度をとっている。

## 3. 考古新資料

21 世紀に入り、国家文物局は重点遺跡の調査計画を策定し、重点遺跡である前漢皇帝陵の考古調査を具体的に実施し多くの考古資料を獲得しているが、墳丘と関連する研究の現状について見てみることにしよう。

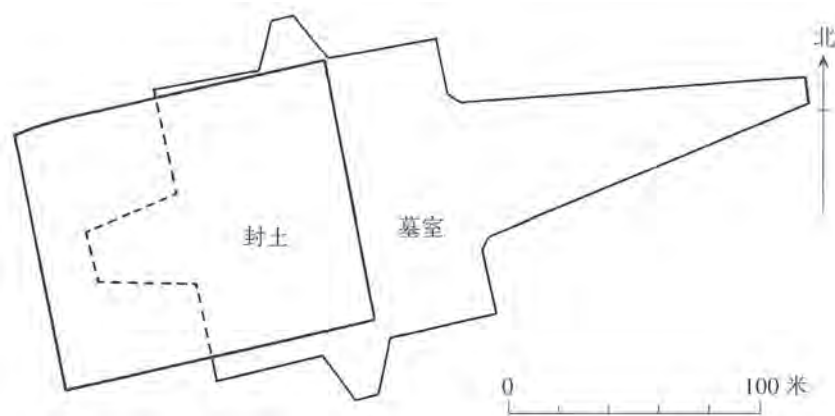


図1 漢高祖長陵帝陵平面図

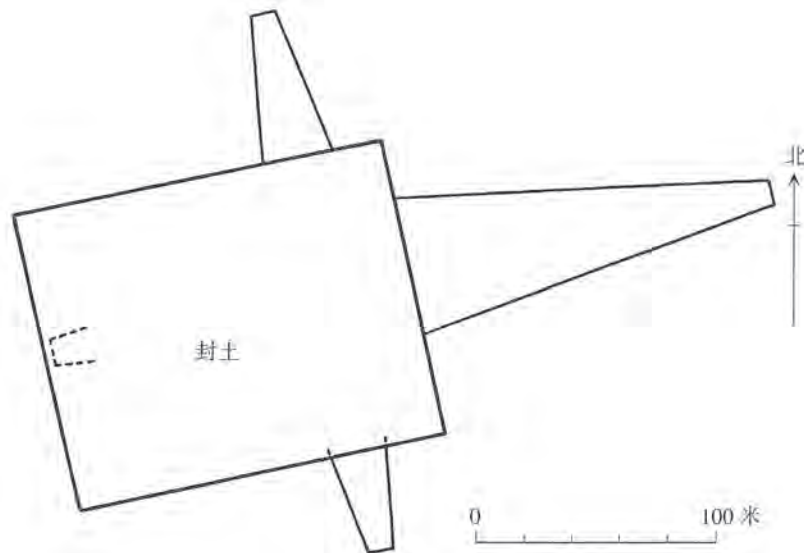


図2 漢高祖長陵呂后陵平面図

### (1) 漢高祖長陵

長陵皇帝陵は現存する墳丘は覆斗形であり、底部の東西長は約 160 m、南北幅約 134 m、墳頂部の東西長は約 49.5 m、南北幅約 17 m、高さ 30 m、土は黄褐色の顆粒状で粒子は荒い。長陵皇帝陵の平面は亜字形で、墓室の平面はほぼ方形を呈し、東西長 144.5 m、南北幅 141.4 m、墓室の四辺の中央部に 1 条の斜めの墓道を有しており、平面形は全て台形状を呈する。東側の墓道が東西長 177 m と最も長く、東端での南北幅 13.4 m、墓室と接する西端で南北幅 68.7 m、南墓道のボーリング調査の結果、すでに明らかになった部分で南北長 25.3 m、南端で東西幅 12.5 m、北端で東西幅 35 m である。西墓道は既に明らかになった部分で、東西長約 14 m、西端で南北幅は約 25.6 m、東幅で南北幅は約 31 m である。北墓道で既に明らかになった部分で、南北長約 26 m、北端で東西幅約 11.8 m、南端で東西幅約 34.3 m である。ボーリング調査のデータから長陵の盛土と墓室は著しく位

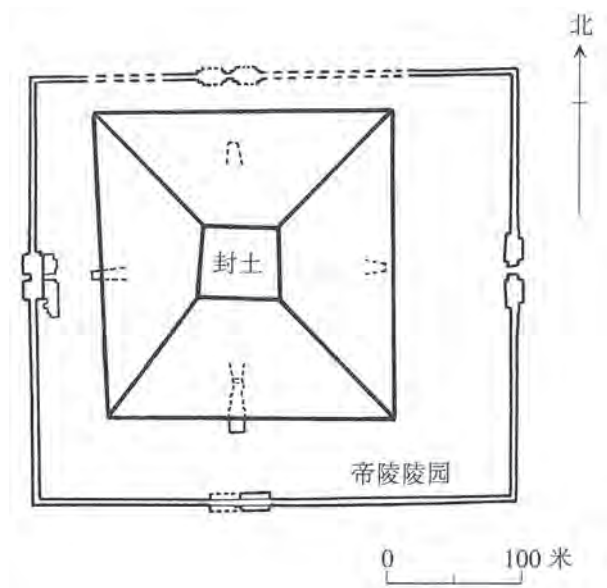


図3 漢平帝康陵陵园平面图

置がずれており、西墓道は完全に盛土に覆われており、東、南、北の3条の墓道と墓室の3分の1は盛土の外に位置している（図1）<sup>(19)</sup>。

長陵呂后陵の現存する墳丘は覆斗形を呈しており、底部は東西長160 m、南北幅136 m、墳頂部は東西長46 m、南北幅約18 m、高さはおよそ30 m、土は黄褐色の顆粒状を呈しており、明確な版築層は見えず、土質はしまりが弱く荒い。呂后陵は平面が亜字形を呈しており、墓室はほぼ方形を呈し、墓室の四辺には傾斜墓道があり、平面形は台形を呈する。東側の墓道は現存する墳丘の東側の中間に位置し、ボーリング調査で明らかになった東西長は157.1 m、東幅の南北幅は10.5 m、西端の南北幅は57.8 mである。南墓道はボーリング調査で、南北長は46.1 m、南端の東西幅は10.6 m、北端の東西幅は24.3 mである。西墓道は明らかになった部分で、東西長8.2 m、西端で南北幅11 m、東端で南北幅はおよそ12.8 mである。北墓道は明らかになった部分で、南北長61.5 m、北端で東西幅およそ10 m、南端で東西幅およそ29.7 mである。呂后陵の墳丘と墓室はある程度ずれており、東墓道はほぼ墳丘外に位置している。また、西墓道は完全に墳丘の下に位置している（図2）<sup>(20)</sup>。

長陵の現存する墳丘の底部の東西の長さは160 m、南北の幅134 mであり、26 mの差があり、比率は16 : 13.4となる。墳頂部の東西長は49.5 m、南北幅約17 mであり、その差は32.5 mであり、比率は3 : 1に近い。底部と墳頂部の比率はあっておらず、また、墓室の3分の1は墳丘の外に出ており、墳丘が墓室を保護する役割を果たしておらず、呂后陵の現存する墳丘も同様の問題がある。この他、皇帝陵と皇后陵の土は黄褐色の顆粒状であるが、明確な版築層は見られず、土質は荒く、墳丘は版築によって構築されるという



特徴と明らかに合致しない。

## （２）漢武帝茂陵

武帝茂陵の墳丘の位置は陵園の中央に位置している。現存する墳丘は覆斗形で、底部の東辺長は 243 m、南辺長は 238 m、西辺長は 243.2 m、北辺長は 240 m である。墳頂部の東辺長は 36 m、南辺長は 41.6 m、西辺長は 39.2 m、北辺長は 41.7 m であり、地表からの高さは 48.5 m、墳丘の底部と陵園周囲の壁との距離は 80 ～ 86 m である<sup>(21)</sup>。

茂陵の封土の底部の西辺長は 243.2 m、南辺長は 238 m であり、その差は 5.2 m であり、墳丘の底部と陵園周囲の壁との距離は 80 ～ 86 m であり、その差は 6 m である。墳頂部の東辺長は 36 m、北辺長は 41.7 m であり、その差は 5.7 m である。墳丘の現在の地表面からの高さは 48.5 m であり、文献に記載のある「十四丈<sup>(訳註 2)</sup>」<sup>(22)</sup>との差は 16.16 m である。この誤差の要因は、文献による記載の間違ひの可能性と建築以来何回も実施された修復による可能性の両方がある。

## （３）漢平帝康陵

康陵の墳丘は二層台を有する方錐体であり、覆斗形である。墳丘の形態は整っており、ほぼ正方形を呈し、墳頂部は平らでやや広々としており、中心部はやや盛り上がっている。底部の東辺長は 235.2 m、西辺長 232.3 m、北辺長 222.3 m、南辺長 214.5 m、墳頂部の東辺長は 55 m、西辺長は 54.4 m、北辺長は 56 m、南辺長は 61 m である。現地表面からの高さは 36 m であり、墳頂部は 4.5 から 6 m 程度の平らな台状であり、東側と西側の幅は 6 m、南側と北側の幅は 11.5 m である。皇帝陵の陵園の東壁と墳丘までの距離は 86 ～ 88.4 m、南壁と墳丘までの距離は 58.7 ～ 61.6 m、西壁と墳丘までの距離は 43.5 ～ 51.4 m、北壁と墳丘までの距離は 23.5 ～ 25.7 m である（図 3）<sup>(23)</sup>。

康陵の墳丘は二層台式であり、底部の東辺長は 235.2 m、南辺長 214.5 m で、その差は 20.7 m、墳頂部は北辺長 56 m、南辺長 61 m で、その差は 5 m である。皇帝陵の墳丘と陵園の周囲 4 方向の塀までの距離の差は更に大きく、東壁と墳丘までの距離は 86 ～ 88.4 m、北壁と墳丘までの距離は 23.5 ～ 25.7 m となる。康陵の配置については解釈が難しい。

## （４）「周王陵」

現地面には 2 基の大きな盛土があり、2 つの盛土は南北に対置している。南側の墳丘の規模がやや大きく、陵園の南側中央に位置しており、北側の墳丘は、やや小さく陵園北側の中央部に位置している。2 基の墳丘の中心間の距離は 221.5 m、縁辺間の距離は 146 m である。南陵の墳丘は覆斗形であり、底部の東辺長は 103.3 m、南辺長は 99.7 m、西辺

長は 103.7 m、北辺長は 90 m である。墳頂部の東辺長は 48.1 m、南辺長は 41.4 m、西辺長は 46.6 m、北辺長は 43 m で、現存の高さは 14 m である。北陵の墳丘は覆斗形であり、底部の東辺長は 57 m、南辺長は 66.2 m、西辺長は 55.5 m、北辺長は 65.4 m である。墳頂部の東辺長は 10 m、南辺長は 9.5 m、西辺長は 9.8 m、北辺長は 9.5 m で、現存の高さは 17.5 m である<sup>(24)</sup>。

「周王陵」は、墳丘の底部、墳頂部の距離の差が大きい以外は、南陵の墳丘の規模が比較的大きく、高さ 14 m、北陵の墳丘の規模は小さく、高さは 17.5 m である。陵墓の墳丘の大小と高さが比例していることは、すでに大量の考古資料が実証しており、「周王陵」の墳丘の現状は歴代の盗掘と修復が関係しているとするべきである。

#### 4. 関連する認識

関中地区の秦、前漢皇帝陵は歴史上多数の盗掘を受けており、何度も修復されている。加えて、2 千年に渡る生産活動、風雨による盛土の流出などがあるため、現存する墳丘と当時の元の姿に差異があると考えられる。墳丘の変化が比較的少ないのは、漢(景帝)陽陵、漢(宣帝)杜陵等であり<sup>(25)</sup>、墳丘の変化が大きいのは漢(高祖)長陵、漢(平帝)康陵と「周王陵」の南北 2 陵である。そのため、現存する墳丘によって基礎的な研究を直接的に進めるとするのは、理論上誤りである。しかしながら、歴代行われた破壊の程度及びそれに対する修復が早々に行われていたであろうことを考慮すると、秦、前漢皇帝陵の墳丘の現状を基礎に、その変化の過程を参照し、文献での記載を結びつけて考え、その形態について研究を行うことは可能である。とりわけ、規模の大きな秦漢皇帝陵についてはそうであろう<sup>(26)</sup>。

現在知られている考古資料からすると<sup>(27)</sup>、戦国時代後半から前漢末までの秦漢王、皇帝陵の平面形態及び大きさは表 1 の通りである。

既に知られている考古資料は、秦の恵文王から秦の 5 人の王及び始皇帝陵<sup>(30)</sup> から前漢 11 人の皇帝陵まで<sup>(31)</sup>、始皇帝陵以外は、形態はいずれも亜字形墓である。ボーリング調査から明らかになった墓室の平面形態は方形か方形に近い形である。劉慶柱と李毓芳による「方上」の研究結果からすると<sup>(32)</sup>、墳丘の基本的な意味を考えると方形の墓室の上に覆斗形の墳丘があることについては同意することができるが、二層台式、三層の階段式、坊形については、根拠となる文献と考古資料に乏しいと言わざるを得ない<sup>(33)</sup>。



## おわりに

「古から今まで、未だ滅んでない国は無く、また、盗掘を受けない墓は無い」ことを考えると、我々は関中の秦漢皇帝陵以外に、中国のその他の地区、時代の陵墓の墳丘にも発生した変化の可能性についても検討すべきである。例えば河南省洛陽地区の後漢皇帝陵は、先に「卓、洛陽諸陵及大臣の冢墓を発く（董卓は洛陽の諸陵及び大臣の冢墓を発掘した）」<sup>(34)</sup>という盗掘を受けた後、修復されている。そして、「孫堅陽人より洛陽に入り、諸陵を修復し、軍を引き魯陽に還す（孫堅は洛陽に入ってから、諸陵を修復し、軍を率いて魯陽に帰還した）」とあることから<sup>(35)</sup>、現存する墳丘と本来の墳丘の規模は全く異なる<sup>(36)</sup>。このため、古代中国の陵墓墳丘の研究においては、その変化の過程に注意する必要がある。

表 1

名 称	墓坑形態	墓室平面形状	東西長	南北幅
咸陽秦惠文王陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽秦悼武王陵	「亜」字形	方 形	82m	84m <sup>(28)</sup>
臨潼秦東陵一号陵園 M1	「亜」字形	方 形	57m	58m
臨潼秦東陵一号陵園 M2	「亜」字形	方 形	58m	56m
臨潼秦東陵四号陵園 M1	「亜」字形	方 形	56.5m	55m
長安戦国秦夏太后陵	「亜」字形	方 形	29m	28m <sup>(29)</sup>
臨潼秦始皇帝陵	「亜」字形	「中」字形	160m	140m
咸陽漢高祖長陵	「亜」字形	近 方 形	144.5m	141.4m
咸陽漢惠帝安陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
灊橋漢文帝灊陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢景帝陽陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢武帝茂陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢昭帝平陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
長安漢宣帝杜陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢元帝渭陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢成帝延陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢哀帝義陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査
咸陽漢平帝康陵	「亜」字形	ボーリング未調査	ボーリング未調査	ボーリング未調査

## 註

- (1) 袁仲一 1990『秦始皇陵兵馬俑研究』文物出版社
- (2) 陝西省考古研究所等 1988『秦始皇陵兵馬俑一号坑発掘報告』文物出版社
- (3) 王学理 2000「秦漢相承帝王同制—略論秦漢皇帝和漢諸侯王陵園制度的繼承和演變」『考古与文物』2000-6 期
- (4) 楊鴻勛 1982「關於秦代以前墓上建築的問題」『考古』1982-4 期
- (5) 李毓芳 1987「前漢帝陵封土淵源与形制」『文博』1987-3 期

- (6) 劉慶柱・李毓芳 1987『前漢十一陵』陝西人民出版社
- (7) 同註 3
- (8) 焦南峰 2006「前漢皇帝考古發掘研究的歷史及收穫」『西部考古』第 1 輯、三秦出版社
- (9) 梁雲 1999「秦漢都城和陵墓建制的繼承与變異」『陝西師範大學學報』（哲學社會科學版）第 28 卷第 3 期
- (10) 王子今 1987「秦始皇陵復土工程用工人數論証」『文博』1987-1 期
- (11) 劉占成等 2010「秦始皇陵封土研究」『秦俑博物館開館三十周年秦俑學第 7 屆年會國際學術檢討會論文集』三秦出版社
- (12) 陝西省考古研究所等 2006『秦始皇帝陵園考古報告（2000）』文物出版社
- (13) 段清波 2006「秦始皇陵封土建築探討—兼析‘中成觀遊」『考古』2006-5 期
- (14) 同註 9
- (15) 王志波・劉春華 2003「秦始皇陵封土形式意義試探」『秦文化論叢』第十輯、三秦出版社
- (16) 睡虎地秦墓竹簡整理小組 1978『睡虎地秦墓竹簡』文物出版社
- (17)『漢書』劉向伝、中華書局、1962 年
- (18)『旧唐書』王徽列伝「時京師修復之後、宮寺焚燒、園陵毀廢、故車駕久而未還、乃以徽為大明宮留守、京畿安撫制置修奉園陵等使。」、『旧五代史』唐書溫韜列伝「溫韜、華原人。少為盜、据華原、事李茂貞、名彥韜、後降于梁、更名昭囟。為耀州節度、唐諸陵在境者悉發之、取所藏金寶、而昭陵最固、悉藏前世圖書、鐘・王紙墨、筆跡如新。」
- (19) 陝西省考古研究院に資料現存
- (20) 陝西省考古研究院に資料現存
- (21) 陝西省考古研究院等 2011「漢武帝茂陵考古調查、勘探簡報」『考古与文物』2011-2 期
- (22) 宋敏求『長安志』では、『関中記』中の「漢諸陵、皆高十二丈、方一百二十步。惟茂陵十四丈、方百四十步」を引用する（『古今圖書集成』、中華書局、巴蜀書社、1985 年）。
- (23) 陝西省考古研究院に資料現存
- (24) 陝西省考古研究院等 2011「咸陽‘周王陵’考古調查、勘探簡報」『考古与文物』2011-1 期
- (25) 陝西省考古研究所「漢景帝陽陵考古新発見」『文博』1999-6 期
- (26) ここで指す平面及び立体の形状は、平面は正方形で、盛土は覆斗形を呈する。
- (27) 陝西省考古研究院等 2011「咸陽‘周王陵’考古調查、勘探簡報」『考古与文物』2011-1 期、咸陽市文物考古研究所等 2010『前漢帝陵鑽探調查報告』文物出版社、陝西省考古研究所等 1987「秦東陵第 1 号陵園勘查記」『考古与文物』1987-4 期、陝西省考古研究院等 2007『秦始皇帝陵園考古報告（2001～2003）』文物出版社、陝西省考古研究院等 2011「漢武帝茂陵考古調查・勘探簡報」『考古与文物』2011-2 期、中国社会科学院考古研究所 1993『漢杜陵陵園遺跡』科学出版社、劉慶柱・李毓芳 1987『前漢十一陵』陝西人民出版社

- (28) 咸陽市文物考古研究所等 2010『前漢帝陵鑽探調査報告』（文物出版社）を参照頂きたい。原文には、「墓室の平面形は方形を呈し、墓の上面の辺長は 82 ～ 84m あり、現存する墳丘の大きさよりやや小さい」とある。
- (29) 資料は陝西省考古研究院の張天恩が提供している。
- (30)『史記』秦始皇本紀に、「二世皇帝、国を享くこと三年、宜春に葬る」とある。『正義』では『括地志』を引いて次のように述べる。すなわち、「秦の故胡亥の陵は雍州万年県南三十四里に在り」と。それゆえ、ここでは秦の二世胡亥は含まない（『史記』、中華書局、1959 年）。
- (31) 現在の考古資料からみれば前漢 11 陵はいずれも「亜」字形であり、皇后陵は「亜」字形、「中」字形、「甲」字形である。そのため、ここでは 11 基の皇帝陵についてのみ言及している。
- (32) 註 6 に示した文献の 157 頁を参照頂きたい。
- (33) 始皇帝陵については、本来は 9 段の高台木造建築であったため、いわゆる墳丘とは、墓室を保護する建築基壇であった可能性もある。
- (34) 周天遊 1987『後漢紀校注・孝献皇帝』天津古籍出版社
- (35) 同註 34
- (36) 韓国河 2005「後漢陵墓踏査記」『考古与文物』2005-3 期、韓国河 2007「後漢帝陵有関問題的探討」『考古与文物』2007-5 期

#### 訳註

- (1) 松崎つね子 2000『睡虎地秦簡』明德出版
- (2) 1 丈 23.1 m

原典：焦南峰「秦、西漢帝王陵封土研究的新認識」『文物』2012 年第 2 期（高野晶文訳）

# 秦、西汉帝王陵封土研究的新认识

焦 南峰（陕西省考古研究院）

长期以来，学者们对地处关中地区中部的秦、西汉帝王陵封土进行了多角度的研究。本文通过文献记载和考古新资料说明，秦、西汉帝王陵在历史上遭受多次盗掘，经过多次修复，加之两千余年的生产活动、水土流失等，现存封土与始建原貌有差异，秦、西汉帝王陵墓室之上覆盖的封土应为覆斗形。

## The New Opinions on the Reserches on the Tumuli of the Imperial Mausoleums of the Qin and Han Dynasty

JIAO Nanfeng

(Shaanxi Academy of Archaeology, China)

In the past long time, the scholars have made multi-aspect studies on the tumuli of the imperial mausoleums located in the middle of the Guanzhong Plain. Referring to the historic literature and new archaeological date, this paper points out that in the history, the imperial mausoleums of the Qin and Western Han Dynasties have been robbed and restored and amended for many times; plus the productive activities and natural erosion, the shapes of these tumuli seen at present are different from their original forms. The tumuli built over the graves of the emperors of the Qin and Western Han Dynasties would have been square frustum in shape.